山登如

2021年度
付中通信第２号

英語談義

2021.5.11　　高水高等学校付属中学校長　宮本　剛

今年度、中学校の学習指導要領が全面改定されました。教科で一番変化が大きいのは英語だ、というのが一致した意見です。小学校５・６年生の課程に、英語が教科として組み込まれたために、中学校課程の進度が１年くらい前倒しされました。覚えなければならない単語の数も、倍にふくれあがっています。高校入試の英語問題にも影響が及ぶのは必定で、来年度入試は波乱が予想されます。

ところで、外国語教育を小学校課程に持ち込んだ理由は、英語を中高６年間も学ばせたのに、聞けない・話せない・使えないという人が圧倒的に多いということだと思います。また、英語嫌いの生徒も多く、数学に次いで学力差が広がる教科だとも言われています。グローバル社会の中にあって、日本人の英語力は時間をかけた割に低い。アジアの諸外国と比べても見劣りするということを言う人もいます。

高校生国際交流の現場

そこで、小学校課程から英語を勉強させて実績を上げた他国の例にならって、日本も後れを取るまいぞという訳でしょう。しかし、本当に早くから英語を学ばせたら、英語力が向上するのでしょうか？

私はアジアの旅先で英語は苦手だと言うと、たいていこう訊（き）かれました。何年英語を学んだか。10 年（中３年・高３年・大４年）だと答えると、信じられないという表情で彼らは私を見返したものです。10 年もいったいお前は何をしていたんだという眼、その眼に触れるまでもなく、私自身もそう答えておきながら、やるせなく荒漠たる思いに駆られるのです。誰も言わないけど、これは日本教育の恥部ではない

かと。

使えないのは、学習する年数の問題ではなく、教育方法と社会環境の問題だと私は常々考えています。インド商人なら最低でも母国ならぬ母州言語と周辺言語（州単位で言語が異なる）そしてヒンディー語、英語と、多数言語をマスターしているのは当たり前だと聞いたことがあります。そうでなければ生きていけないからです。それに対して日本人は国内に留まっているなら、日本語さえできれば十分生活できます。しかもそれが普通だと思っている。そんな国は実は国際社会においては珍しく、著しく恵まれていると言えるのです。私たち日本人はそういう環境に甘えて育ってこられたし、今まではそれでよかったのかもしれません。

高校生国際交流の現場

しかし、今や事情は大きく変わりました。日本人が日本人とだけ一生のんびりと付き合っていられ、しかも何ら不自由を感じないという時代は、終わったのです。多様性社会を築いてゆく道すがら私たちは外国人とも交流し、互いの気持ちを伝え合いたい局面に数多くぶつかるでしょう。日本社会を安定させるためにも英語の運用能力は不可避です。

そこで、問題は何をどう教えるかということに尽きますが、中学英語の教科書をひも解く限り、結局のところ、小学校で先取りした分、それを前提に内容を濃く難しくしてしまったようにしか見えません。習得すべき表現や語彙を増やせば、従来通り、教師は文法や読解の理屈のノウハウを教授する方向に流れてしまうのではないでしょうか？　これでは、２年前倒しで英語嫌いを作ってしまおうというふうにしか思えません。

懸案の、英語嫌いを作らないためには、聞いたり話したりの練習時間を増やして、英語のコミュニケーション能力を高めるという方向で教育課程を編成すべきです。習得する内容は従来通りでよいから、時間ができた分をコミュニケーション能力の向上に費やすようにすればいい。私のような恥ずかしい日本人を作らない英語教育をどうして志向できないのか、不思議でなりません。

本校では、最終的に英語を大学入試の得点源にできることはもとより、６年間学んだことを外国人に怪しまれない程度に、使える英語の習得も同時に目指しています。文法力と会話力を２つともども成り立たせることに困難を感じる人もいますが、どちらか一方のみに特化して学ばせることは不健全であり、結局習得スピードも落ちてしまいます。語学習得の本来のあるべき姿を目指して教科内の議論を深め、質の高い英語教育を生徒に還元していきたいと思います。